

## ダルマキールティの聖典観：『プラマーナ・ヴァールティカ』第1章および自註の和訳（7）

大前，太

<https://doi.org/10.15017/2328501>

---

出版情報：哲學年報. 50, pp.89-116, 1991-03-30. 九州大学文学部  
バージョン：  
権利関係：

# ダルマキールティの聖典観

—『プラマーナ・ヴァールティカ』第1章および自註の和訳(7)—

大 前 太

## 目 次

- VI. ヴェーダ聖典の恒常性を否定する。(第269偈—第283偈)
  - 0. 問題提起
  - 1. 語の恒常性を否定する。(第269偈—第282偈)
    - 1.1. 消滅は原因をもたない。(第269偈 ab)
      - 1.1.1. 消滅が消滅するものと別個の事物であることを否定する。  
(第269偈 cd—第272偈)
      - 1.1.2. 消滅が消滅するものと別個の事物でないことを否定する。(第273偈)
    - 1.2. 反論とそれに対する答(1) (第274偈)
    - 1.3.                    ♪                    (2) (第275偈—第280偈)
    - 1.4.                    ♪                    (3) (第281偈—第282偈)
  - 2. 語と対象の関係の恒常性を否定する。(第283偈)  
(未完)

## 和 訳

### VI

- 0. (G.141,14; M.94,24; P.319,7)

さらにまた、いかなる恒常的な本性も存在しないのであるから、現に存在する語は非恒常的なものであるはずである。そして、それ [= 語] は、(1)原因を

もたないか、(2) [人間] 以外のものを原因とするか<sup>(1)</sup>、いずれかである。[そのうち、原因をもたないとすれば、他を必要としないのであるから、語は] 常に存在することになろう<sup>(2)</sup>。また、[人間以外のものを原因とするとすれば、語が] 人間の活動から [生起することは] ない [であろう。しかし、実際には、語は人間の活動から生起するのである<sup>(3)</sup>]。それゆえに、[語は] 非人為的なものではない。

1. (G.141,17; M.94,27; P.319,10)

【問：】「語あるいは [大地等の<sup>(4)</sup>] 他の存在物は非恒常的なものである” というこのことはどのようにして知られるのか。」

【答：】

消滅は存在性一般 (sattamātra) に随順するから、語は非恒常的なものである<sup>(5)</sup>。 [第 269 偈 ab]

実に、諸存在物の消滅 [という別個の属性<sup>(6)</sup>] が何かある [消滅の原因] から生起するということはない。それゆえに、[消滅とは] 存在物の本性 [に他ならない] であろう。なぜなら、存在物そのものが、自己の原因から、[消滅という] その属性をもって生起するからである<sup>(7)</sup>。そして、[消滅は、何かある] 特定の存在物 (bhāva-viśeṣa) の本性なのではない。そのことは後に否定されるからである。それゆえに、[消滅は] 存在一般 (bhāva-mātra) の本性<sup>(8)</sup>であろう。以上によって、語であれ、他のものであれ、存在性を享受するまさにすべての存在物は非恒常的なものである、ということが確定した。

【反論：】「確定してはいない。なぜなら、消滅それ自体が他から生起するのではないということが成立しないからである<sup>(9)</sup>。すなわち、“火によって薪が [焼き尽くされる]<sup>(10)</sup>”，“棒によって瓶が [壊される]<sup>(11)</sup>” という [ように] 消滅の原因が存在物には見られる。[つまり、火等があれば薪等の消滅があり、

火等がなければ薪等の消滅はないという] 随伴・排除の関係 (anvayavyatireka) に従うということ [が消滅に存在するけれども, それ] を原因とそれ [=原因] を有するものの特質と言う。」

【答:】 そうではない。前 [の薪等の瞬間<sup>147</sup>] が自然に消滅したときに, 変異した別のもの [すなわち灰等の後の瞬間<sup>148</sup>] が, [火等の] 特定の補助因に依拠して生起するから [ , 世間の人々は火等は薪等の消滅の原因であると理解するの] である。[火等が薪等の消滅を惹起するからではない。<sup>149</sup>]

#### 1.1.1. (G.142, 4; M.95, 7; P.320, 6)

あるいはまた, 火が薪の消滅の原因であるとしよう。[その場合に] 火から生起するその消滅は, (1)薪そのものであるのか, あるいはまた(2) [薪とは] 別個の事物であるのか。[そのうち,]

[薪とは] 別個の事物 [である消滅] が火から生起するとすれば, 薪が見られることになる。なぜなら [薪は] 消滅しないからである。 [第269偈 cd－第270偈 a]

ある事物 [=薪] とは別個の事物 [=消滅] が生起する場合に, どうして薪が“無くなった (abhūta)”と言われるのか, あるいはまたどうして [薪が] 見られないのか。実に, [その場合には] このようにして過大に適用されることになるであろう<sup>150</sup>。

[反論:] 「[火から生起する] そ [の事物] のみがこれ [=薪] の消滅である<sup>151</sup>。」  
と言うならば。 [第270偈 ab]

【反論:】 「火から生起するその事物のみが [薪の] 無 (abhāva) [すなわち消滅<sup>152</sup>] である。それゆえに, これ [=薪] は, “無くなった” のであるから, 見られないのである。」と言うならば。

【答：】それ [=火から生起する事物] に“無”というこの名称があるとしてよう。そうであっても、[単なる名称だけで、]

どうして、[第270偈 b]

あるものが [それとは] 別個のものの消滅であるのか。実に、[火から生起する] 何かある事物に対して [“消滅” という] 名称を与えるだけで、薪が見られないというのは理にかなっていない。そして、ある [事物] が [それとは] 別個のものの消滅であるということはない。なぜなら、過大に適用されることになるからである<sup>18</sup>。[その理由は、薪とは] 別個の事物であるという点で、実在であるそれ [=火によってもたらされる薪の消滅] は、それ以外のもの [たとえば、瓶等] と区別されないからである。

【反論者：】「薪における、火によってもたらされる本性が消滅なのであって、[瓶等] すべてが [薪の消滅であるの] ではない。[したがって、過大に適用されるということはない。]」と言うならば。

【立論者：】“薪における<sup>19</sup> [消滅]” という [場合の薪と消滅の] 関係は何か<sup>20</sup>。

【反論者：】「依拠されるものと依拠するものの関係である<sup>21</sup>。」と言うならば。

【立論者：】そうではない。なぜなら、それ [=依拠されるものと依拠するものの関係] は後に否定されるからである。

【反論者：】「生起するものと生起させるものの関係である<sup>22</sup>。」と言うならば。

【立論者：】どうして、“火から [消滅が生起する]” と言うのか。なぜなら、他ならぬ薪から [消滅が] 生起するからである。

【反論者：】それ [=火] に依存して [薪] から [消滅が] 生起するのであるから、[消滅は火によってもたらされるのではないであろうというこのような] 過誤はない<sup>23</sup>。」と言うならば。

【立論者：】「[火から] 付加的特性を得ることがない [薪] に [火に対する] いかなる依存があるのか。あるいは, [火から薪が付加的特性を] 得るとすれば, 別の [すなわち, 付加的特性と呼ばれる第二の] 薪が生起することになるであろう<sup>20</sup>。一方, 消滅の原因をもたない前 [の薪] は [以前と] まったく同じように見られるであろう。

【反論者：】「[ある火から付加的特性をもった第二の薪が生起するときに,] 同じその火にもとづいて, 前 [の薪] が消滅するのである。」と言うならば。

【立論者：】“前 [の薪] とこれ [=火によってもたらされる消滅] の関係は何か”という同じその過誤に陥ることになり, そして, [同じことを繰り返すことによって] 際限がなくなってしまう。それゆえに, 消滅と結びつくことが可能な [薪の] 後の付加的特性を補助しつつも, 火は, まったく新しい [薪] を生み出すのであるから, 前 [の薪] は必ず同じ状態のまま見られるであろう。

また, 薪の消滅とは薪が無くなること (abhāva) であると言われている。しかし, 非存在 (abhāva) は結果 (kārya) ではない<sup>21</sup>。そして<sup>22</sup>, それ [=非存在] をもたらすものとは“もたらさないもの (akāraka)”に他ならないのであるから, [薪の消滅は火等を] 必要としない, ということはすでに述べている。

また, [薪等の] 本性の非存在 [すなわち消滅] がそれ [=薪等の本性] と異なる場合には, [薪等の存在物は別個の事物である非存在を欠くことになり<sup>23</sup>,] それ [=非存在] を欠く [薪等の] 存在物の本性のみが確立されるであろう<sup>24</sup>。したがって, どうして [薪が] “無くなった”と言われるのか。

以上のことから, [ある事物がそれとは別個の事物の消滅なのでは] ない。

あるものが [それとは] 別個のものの消滅であるとしよう。[しかし, 火によってもたらされる消滅が薪とは別個の事物であるとすれば, 薪は同じ状態のままなのであるから,] どうして薪が見られないのか。[第270偈 cd]

ここで別個の事物 [すなわち火から生起する消滅] が生起することと薪が見られることの間にいかなる矛盾があるのか。

〔反論：〕「それ [=火によってもたらされる別個の事物である消滅] に包摂されるから [薪が見られないの] である。」[と言う] ならば。〔答：〕 そうではない。なぜなら、それ [=別個の事物] によって [薪が] 妨げられることはないからである。〔第271偈 ab〕

もし、[火によってもたらされる] その別個の事物に包摂されるから薪が見られないのであるならば、それ [=火によってもたらされる別個の事物] は薪を妨げるものであるということになる。しかし、このことは理にかなっていない。そもそも、妨げ (āvaraṇa) は、[妨げられる事物の] 知覚を妨害するのであって、阻害<sup>(29)</sup>等<sup>(30)</sup>の実体の能力を [妨害するの] ではないであろう<sup>(31)</sup>。そして、[妨げが、薪の] すべて [の能力] を妨害するとすれば、[火によってではなく、] これ [=妨げ] のみによって<sup>(32)</sup> [薪という] 実体が消滅してしまうことになるのではないか。なぜなら、[妨げのみによって、薪の] すべての能力が失われてしまうからである。また、[このようにして] それ [=火によってもたらされる消滅の原因] についても、火について [過誤が指摘されたの] と同様に、過誤に陥ることになるから<sup>(33)</sup>、無限後退となる<sup>(34)</sup>。あるいはまた、これ [=薪] の阻害<sup>(35)</sup>能力等が失われないとすれば、[火から生起する] 別個のものがたとえ存在していても、それによって、どうして [薪が] 消滅するのか。

また、もし、火から生起する消滅と呼ばれる別個の事物が包摂するから薪が見られないのであれば、

消滅が消滅することになるであろう。なぜなら、[消滅は] 生起するものであるからである<sup>(36)</sup>。それゆえに [すなわち、消滅が消滅するのであるから] 再び薪が見られる [ことになろう]。〔第271偈 cd—第272偈 a〕

実に、生起するものである [限り、薪等の] 消滅は、必ず消滅するはずである。[そして、] それ [=薪の消滅] が消滅した場合には、再び薪等が出現することになろう。

〔反論：〕「しかし、たとえば〔チャイトラの〕殺害者が殺害された場合に、〔殺害された〕チャイトラが生き返ることがないのと同様に、この場合〔すなわち、薪の消滅が消滅した場合〕も〔薪が再生することはない。〕。』と言うならば。〔答：〕そうではない。なぜなら、殺害者は死ではないからである。〔第272偈a-d〕

〔反論：〕「消滅が消滅したとしても、実在物が元通りになることはない。実に、殺害者が殺害されたとしても、彼〔＝殺害者〕によって殺害された者は生き返らないのである。」と言うならば。

〔答：〕そうではない。なぜなら、殺害者は〔死そのものではなく〕死の原因であるからである。我々は、消滅の原因である火や棒等が除かれた場合に、〔消滅した〕存在物が〔再び〕生起するはずである、と言っているのではない。それではどうであるのか。〔火等によって薪等の〕存在物が無くなること——完全に認識されなくなる——が〔除かれた場合に、存在物は再び生起するはずである、と言っているの〕である。それ〔＝無くなること〕が除かれた場合に、本性が存続する以外に〔存在物に〕いかなるあり方があるのか。そもそも、チャイトラの殺害者は消滅に相当するものではない。それではどうであるのか。〔消滅の原因である〕棒等に相当するものである。実に、消滅に相当するのはこの者〔＝チャイトラ〕の死である。そして、それ〔＝死〕が除かれた場合には、この者〔＝チャイトラ〕はまさに生き返るであろう。

#### 1.1.2. (G.144, 2; M.96,19; P.322,15)

一方、消滅が〔薪等とは〕別個でないとしても、同じ薪が消滅であることになろう。〔そして、〕それ〔＝自己の原因からすでに生起している薪〕は〔消滅の原因とみなされている火が存在する以前に〕存在しているのであるから、〔火は薪に対して何もなさないことになり、したがって、薪を本性とする消滅は〕原因をもたないことになる。〔そして、実在である消滅には、それであるか他であるかという〕これ以外のあり方は存在しない。〔第273偈〕

消滅が薪とは別個の事物でない [とすれば]、同じそれ [=薪] がそれ [=消滅] であることになる。そして、それ [=薪等] は [火等が近在する] 以前に存在しているのであるから、火等に、これ [=薪等の消滅すべきもの] に対するいかなる能力があるのか。それゆえに、[消滅の原因とみなされている火等が] それ [=薪等] を補助することはないのであるから、それ [=薪等] は決して [消滅の原因を] 必要としない。また、“これ [=薪等] のこれ [=消滅の原因]” という関係もありえない。なぜなら、それ [=関係] は補助に起因するからである。そうでなければ、過大に適用されることになるからである<sup>87)</sup>。

[火等が薪等を] 間接的に補助するとしても、その補助は、[薪等とは] 別個の事物であるのか、あるいはまたそれ [=薪等] に他ならないのか、というこの選択肢が必ず付随する<sup>88)</sup>。[そのうち、補助が] それ [=薪等] とは別個の事物であるとしても、“それ [=薪等] の [補助]” [というこの関係は何か] というように、さらに [火等によってなされる薪等に対する補助の] 補助たるゆえんが問われること等<sup>89)</sup>はそのままである。同様に [補助が薪等とは] 別個でないとしても [消滅が薪とは別個でない場合について指摘した過誤がそのまま当てはまる]。それゆえに、[ある] 本質 (rūpa) が実在するとすれば [それは] それであるか他であるか [という選択肢] を逸脱しないから、そして補助を生起させることは [実在する] 本質を完成させることを特質とするから、それもそれでないものもつukらない [ような消滅の原因] は決して “つくるもの (kartr)” ではない。したがって、[そのような消滅の原因は] いかなるもの原因でもない。そして、[消滅の] 原因でないものは [消滅するものによって] 必要とされないのである。それゆえに、この存在物は自ら [すなわち、存在性のみによって] それ [=消滅] を本性とする、ということが確定した。

1.2. (G.144,15; M.96,29; P.323,14)

[反論:] 「消滅が原因をもたないとしても、[原因をもたないものは] 恒常的なも

のなのであるから、[存在時にも消滅が存在することになる。そして、このようにして] 存在と消滅とが共存するという過誤に陥ることになる。」と言うならば。[答:] [そのような過誤はない。消滅という] 非実在 (asat) なるものがどうして恒常であろうか。[第274偈]

〔反論：〕 次のように言うかもしれない。「ある者によれば、消滅は原因をもたない [ということだが]、[その場合には] 必然的にそれ [=消滅] は恒常的なものであることになる。したがって、その非存在 [すなわち、消滅の欠如] を特質とする存在と [存在の欠如を特質とする] 消滅とが [一つの事物に] 同時に存在することになるであろう。」と。

〔答：〕 そうではない。なぜなら、[実在でない] それ [=非存在] には恒常的な属性も非恒常的な属性もありえないからである。そもそも、実在しないものには [恒常的であるか非恒常的であるかという] この選択肢はありえないのである。なぜなら、それら [恒常・非恒常] は実在物の属性であるからである。また、[存在の欠如を特質とする] 消滅は何ものでもないからである。実に、生起するものは何かあるものと共存することがあるであろう。しかし、消滅は生起しないのである。それゆえに、[上述の] 過誤はない。

### 1.3. (G.144,22; M.97, 6; P.323,20)

[消滅が] 非実在である場合には、存在物が消滅することがなくなるという過誤に陥る、と [反論するかもしれないが、それ] も理にかなっていない。なぜなら、存在物が消滅 [という別個の事物] によって消滅するということを [我々は] 承認していないからである。[第275偈]

“実在しない消滅がどうして存在物を消滅させるであろうか。このゆえに、存在物は消滅しないことになるであろう。” という過誤に陥ることは決してない。なぜなら、[別個の事物である] 消滅にもとづいて存在物が消滅するということを [我々は] 承認していないからである。そもそも、“消滅といういか

なるものも存在しない”と述べる者が、どうして、それ [=消滅] にもとづく存在物の消滅を承認するであろうか。

【反論：】「今や、消滅 [という別個の属性] が存在しない場合に、どうして、存在物が“消滅した”と言われるのか。そもそも、生起した状態において [存在物に] 消滅が存在しない [ならば、それら] が“消滅した”とみなされることはないのである。実に、ある [事物 (X)] が、ある [本性 (Y)] によって、“それをもつ”のでないとき<sup>40</sup>、それ (X) が、[関係のない] それ (Y) によって、そのように [“それをもつもの”と] 言い表される、あるいは認識されるということはないのである。たとえば、馬が、角によって、[“角をもつもの”と] 言い表されたり、認識されたりすることが] ないように。」[と云うならば。]

【答：】 実に、[存在物の] 消滅はまったく存在しないというわけではない。[そうではなく、消滅はまさに存在するのである。] しかし、“存在物に属する (bhāvasya)” というようなそれ [=消滅] は存在しない。そうではなく、存在物そのものが、一瞬間存続するという属性をもつ、[すなわち] “消滅”なのである。[世間の人々は、] これ [=存在物] の [一瞬間存続するという] その本性を、後に “これ [=存在物] の消滅が起こった” と判断して<sup>41</sup>、理解した通りに<sup>42</sup> 言い表すのである、ということはすでに述べた。そもそも、[すでに完成している] 存在物に属する [消滅という] 何かあるものがある時起こるのではない。そうではなく、それ [=存在物] 自身が、自己の原因から、そのようなものとして [すなわち、一瞬間存続するものとして] 起こるのである。それゆえに、[消滅という] 現に存在する何かあるものによって、それ [=存在物] が “消滅した” [と言われる] のではない。それではどうであるのか。これ [=存在物] の他ならぬ本性、それによって、それ [=存在物] は “消滅した” とされるのである。

【問：】「[消滅といういかなるものも存在しないのであれば、] それでは、今や、どうして “消滅は原因をもたない” とされるのか。」

【答：】

消滅する存在物は他 [=消滅の原因] を必要としない。したがって、そのこと [すなわち存在物が他を必要とせずに消滅すること] を理解させるために、心 [=概念知<sup>43</sup>] によって、こ [のような消滅という様態] の [存在物との] 相違を仮託して、[存在物の] そのような様態 [すなわち消滅という様態] を [称して] “原因をもたない” と言ったのである<sup>44</sup>。[第276偈]

すでに生起している存在物が他 [=消滅の原因] から消滅を得ることはない。なぜなら、[存在物は] そのようなものとして [すなわち消滅を本性とするものとして] 自ら生起するからである。というわけで、他 [=原因] を必要とする [消滅という] 別個の属性を否定するために<sup>45</sup>、それ [=存在物] の本性を理解させる [という理由で] —— [存在物は他によって消滅するのかしないのかという<sup>46</sup>] ただそれだけを知ろうとする場合に、[消滅という] 属性を属性をもつもの [である存在物] とは別個の事物であるかのように心で区別して<sup>47</sup> —— 他ならぬ本性をそのように [“存在物の消滅は原因をもたない” と] 言っているのである。それを、知性の劣った者たちは、ある場合 [たとえば、“王の家臣 (rājñah puruṣaḥ)” という場合<sup>48</sup>] にはそのように [王と家臣という二つの関係項の間の区別が] 見られる [という理由で]、[この場合にも、“存在物の消滅” という] 表現のみに惑わされて、消滅という [別個の] 属性とそ [のような属性] の存在を仮託し、[そのような属性を] 原因をもつあるいは原因をもたないと [仮託して]、真実が確立されることのないような事物の考察をなして、自らを混乱に陥れているのである。

[反論:] 「非存在 [なる消滅] が自らであっても存在するとすれば、[それであるか他であるかという] この同じ選択肢が [起こる]。」[と言う] ならば。

[第277偈 ab]

[反論:] 「消滅が他から生起するのではないとしても、存在物の消滅がまさに自ら存在するとすれば、[消滅は、存在物] そのものであるか、[それとは] 別個であるか、というこの選択肢 [が起こること] は同じではないか。[別個

であるとすれば、] その時には、[消滅という] 別個の事物が生起するときに、  
 どうして存在物が見られないのか。[存在物が見られることになる。] 別個の  
 事物でないとしても、[存在物] それ自体がそれ [=消滅] である [ことになる]。  
 それゆえに、これ [=存在物] に属するものは何も生起していないのであるから、  
 どうして“消滅した”と言われるのか。」と言うならば。

【答：】 このことについては、

[消滅であれ、別のものであれ、] それ [=存在物] に属する何かあるものが起こ  
るのではない。そうではなく、単に [存在物は] 無くなるのみである。

[第277偈 cd]

と述べているではないか。実に、この者は“消滅であれ、別 [の属性] であ  
 れ、存在物に属する何かあるものが起こる”と言っているのではない。それでは  
 どうであるのか。“存在物それ自体が無くなる”と [言っているのである]。  
 実に、もし [“消滅” という表現によって] 何かある [属性] の生起を述べて  
 いるのであれば、この者によって、存在物は斥けられないであろう<sup>49</sup>。そして、  
 このようにして、存在物の消失が問題となっているのに、問題とされていない  
 ことを述べていることになるであろう。そもそも、何かあるものが生起すること  
 によって、存在物が“無くなった”と言われることはない。もし [存在物が]  
 自ら無くなるのであれば、その時には、“無くなった” [と言える] のである。

また、“無くなる (na bhavati)” というこれは、〈単純否定〉 (prasajyapratishedha)  
 であって、〈除外〉 (paryudāsa) ではない。そうではなく、この場合 [すなわち、  
 単純否定において] も何かある [実在物] の存在が [肯定的に表現される] と  
 すれば、〈[単純] 否定〉と〈除外〉の間に本質の相違がないことになるであろ  
 う。なぜなら、両者ともに肯定が主要なものになってしまうからである。そし  
 て<sup>50</sup>、このようにして、何も否定されなくなるから、〈除外〉も決してないで  
 であろう。実に、もし何かある [実在 (X)] が何かあるもの (Y) から排除さ  
 れるのであれば、それ (X) の〈除外〉によって、それ (X) 以外のもの (Y)

が関わってくるであろう<sup>60</sup>。しかし、そのこと [すなわち、何かあるものを排除するということ自体] が存在しないのである。なぜなら、“排除”と言われた場合に、[実際には何も排除されず、] あらゆる場合に、何かある存在物のみが知られるからである。そして、このようにして、この者は [存在物の排除を述べていても、決して排除を述べているのではなく、] 他でもない別個の事物の存在を述べているにすぎないであろう。[こうして、(X) の〈除外〉によって (X) 以外のもの (Y) が述べられるのに、] その両者の相互の区別が [成立し] ないのである<sup>61</sup>。そして、区別がなければ〈除外〉はないのである<sup>62</sup>。それゆえに、このように否定関係 (vyatireka) が存在しないのであるから、肯定関係 (anvaya) もないであろう。なぜなら、それ [=肯定関係] は同一の本性に立脚することを特質とするからである。そして、それ [=同一の本性] に立脚することは、それ以外のものとの否定関係が存在する場合にあるであろう。しかし、[汝の見解に従えば] それ [=否定関係] は存在しないのであるから、世界は活動することも活動を停止することもなくなってしまうであろう。以上のことから、“あるものの消滅が起こる (nāso bhavati)” と述べられるとき、“それはまさに自ら無くなる (na bhavati)” と述べられたことになるであろう。そもそも、言葉が共通であるからといって、別の対象に見られる規定をすべてに対して結びつけることはできないのである。実に、[ある人間を] “ロバ” と名付けたからといって、[その] 人間に対してもロバの性質が結びつけられるということはないのである。同様に、“チャイトラの息子” というこ [の文章] に見られる規定が“消滅”に対しても [結びつけられるということ] はない。矛盾であるからである。そして、[“存在物の消滅” と] このように表現することについても、目的をすでに示している<sup>64</sup>。

[このように、非存在にはそれであるか他であるかという選択肢は起こらないのであるから、] このゆえに、

存在において [それであるか他であるかという] この選択肢が [起こるの] であろ

う。なぜなら、[“存在する” という] 肯定は實在に随順するからである。

[第278偈 ab]

存在 (bhāva) [すなわち生起 (bhavana)<sup>659</sup>] は必ず存在しているもの (bhavat) [すなわち生起しようとしているもの (bhavitr)<sup>660</sup>] を必要とする<sup>661</sup>。そして、それ [= “存在”] は本性 [すなわち實在<sup>662</sup>] に他ならない。なぜなら、本性のないものが、[たとえば “存在する” というような] 何らかの作用に關与することはないからである。実に、作用 (vyāpāra) とは、[何かある別個の事物なのではなく、] そのような [ある特定の] 本性が生起することである。それ [= 本性の生起] が本性をもたない [消滅] にどうしてあるであろうか。

[問:] 「今や<sup>663</sup>、どうして、“兎の角は非存在である (bhavaty abhāvaḥ śaśaviṣāṇam)” 等<sup>664</sup>と言い表されるのか<sup>665</sup>。」

[答:] 実に、[この文章によって、] “[非存在であれ、他であれ、] 何かある兎の角が存在する” ということが [肯定的に] 述べられているのではない。そうではなく、[この文章によって、] このように、“これ [= 兎の角] は存在しない<sup>666</sup>” という、存在の否定のみがなされているのである。さらにまた、他ならぬ言語活動を行う者たちが、何かある文脈で<sup>667</sup>、これ [= 兎の角等] を、このように “[非存在である” と] 作用をもつものであるかのように仮託して、示しているのである。しかし、[単なる表現のみによって] それ [= 兎の角等] がそのよう [に作用をもつ] ではない。実に、それ [= 兎の角等] における眞実は、一切の対象を欠いていることであって、[生起等] 何かある [作用] に關与することではない。[しかし、汝の承認する] 消滅は決してこのようではない [すなわち、兎の角のように一切の対象を欠くということはない]。なぜなら、實在においてそれ [= 消滅] は生起するからである<sup>668</sup>。もし、それ [= 消滅<sup>669</sup>] も、話者によってこのように “[生起する” とまるで作用をもつかのように] 称される [だけで]、それ自身はそのよう [すなわち、生起という属性をもつ<sup>670</sup>] ではない [と認める] ならば、その時には、[“非存在である” と述べていても、] “何も存在しない” と認めているに他ならないのである。以

上のことから、[実在物において] 自ら生起する本性は、それであるか他であるかという二つの選択肢を逸脱しないのである。

<sup>677</sup>本性が他であること (anyattva) とはそれでないこと (atattva) に他ならない。実に、色と味についても、互いに他であることは [それでないことと] まったく別個ではないのである。

**[反論者:]** 「[そうではなく、互いに] 本性的に関係がないこと (svabhāvāpratibandha) が他であることである<sup>688</sup>。」と言うならば。

**[立論者:]** そ [の関係] によって, [(X) が] それでもなく [すなわち (Y) を本性とするのでもなく], かつ [(Y) とは] 別個のものを本性とするのでもないような, この “関係 (pratibandha)” とは何か。

**[反論者:]** 「[(X) が (Y) から] 生起すること (janman) [が関係] である<sup>689</sup>。」と言うならば。

**[立論者:]** [そうだとすれば,] 原因 [や結果<sup>690</sup>] はすべて互いに [それであるとも他であるとも] 言い表されない (avācya) ことになる。そして, このように [結果であるがゆえに, それであるとも他であるとも言い表すことができないならば], すべてのものがすべてのものに対して [直接的にであれ, 間接的にであれ] 何らかの仕方でも適合するのであるから [すなわち, あらゆる場合に因果関係が存在するのであるから], いかなるものもいかなるものとも別個でなくなるであろう。そして, このように [結果であるからそれであるとも他であるとも] 言い表されないと言うけれども, 他ならぬ因果関係を別の語で述べている [にすぎない] であろう。対象の相違はないのである。そうではなく, 我々は, 本性が [互いに] 相応しないこと [すなわち混交しないこと<sup>691</sup>] が他であることであると言う。そして, それ [=本性が相応しないこと] は, 本性をもつ [すべての事物] に相互にまさに存在する。したがって, [すべての事物は] まさに [互いに] 他であるのである。また, “その生起 (tājjanman)” を特質とする本有関係 (svabhāvāpratibandha) 以外に “関係” というものはない。なぜなら, [(X) に] 依存しないもの (Y) が [(X) に対して] 逸脱することに矛盾はないからである。そして, そのこと [=因果関係以外の関係

がないこと] にもとづいて、また属性の相違にもとづいて、他であるのである<sup>73</sup>。

【反論者：】「[生起によってもたらされる関係はないけれども、] 関係は知識によってもたらされる。」と言うならば。[すなわち、] 次のように言うかも知れない。「あるもの（X）の知識があるもの（Y）の認識なくしてないとき、それ（Y）が知られれば必然的にそれ（X）が顕現するから、それ（X）は、それ（Y）を本質とするものではないけれども、[(Y)と別個のものであると] 言い表されないのである。」と [言うならば]。

【立論者：】 そうではない。なぜなら、それ（X）はそれ自体は本性のないものであるからである。実に、同じそれ（Y）が、[(Y)の形象をもって] 顕現するそれ（X）の本性なのである。なぜなら、これ（X）が本性をもつとすれば、それ（Y）と同じように、[(X)が別個に] 顕現するという過誤に陥ることになるからである<sup>74</sup>。そして [その理由は]、知覚されうるもの（X）が現に顕現していなければ、[それは] 存在しないからである。[(X)が] 知覚されえないとしても、知識がそれ（X）の形象をもつことはないのであるから、何が何に依拠して認識されるのか<sup>75</sup>。そして、あるもの（X）があるもの（Y）に依拠して認識されるとき、[(Y)が顕現していても] それ（X）の本性の顕現そのものが失われることはないのである。たとえば、光に依拠して認識される青等がそうであるように。

あるいはまた、それ（X）のそれ（Y）に対するいかなる近接 (pratyāsatti) [すなわち関係<sup>76</sup>] があって、[(X)という] 本体をもたないその本質（Y）が認識される場合に、それ（X）が自ら近在する [すなわち、自らを把握させる<sup>77</sup>] のか。実に、このようにして過大に適用されることになるであろう<sup>78</sup>。

【反論者：】「現に認識されているもの（X）がそれ（Y）を質料因 (upādāna) とすること [が近接] である。」と言うならば。

【立論者：】 この質料因の意味は何か。[(Y)と(X)が] 原因と結果の関係にあることではない。なぜなら、[そのような因果関係は] 承認されていないからである。あるいは [因果関係を] 認めたとしても、原因と結果が相互の

認識を現前させることはないのである<sup>79)</sup>。

〔反論者：〕「[(X) が (Y) なくしてないことではなく, (X) の] 認識がそれ (Y) なくしてないことが近接である。」と言うならば。

〔立論者：〕関係が存在しなければ, [(X) の認識が (Y) なくしてないこと] そのものがありえない, と述べているではないか。また, 原因でも結果でもないものの間にはいかなる [実在的な] 関係もない, ということも [幾度も] 述べている。“ある認識 (X) がある認識 (Y) なくしてない”と言われるのも, その認識 (X) が存在する場合に [成り立つこと] であろう。[しかし, そのような認識は存在しないのである。] そもそも, あるもの (X) が, 知識において, 本質でないもの [すなわち他] と混じり合うことのない本質として, 顕現しないときには, それ (X) に対するいかなる知識もないのである。[そして,] そ [のような知識] が存在しないのであるから, 事物の本質 (X) の “表示されえない (avācyata)” という特質も成立しない。以上のことから, 実際に存在するものは, それであるか他であるか [という選択肢] に関わるはずである。<sup>→67)</sup>

一方, ある者によれば, 消滅しつつある存在物に属するものは何もないのであるが, 彼によって,

“[存在物が] 非存在となる (abhāvo bhavati)” と [肯定的に] 述べられていても, “存在物が存在しなくなる (na bhāvo bhavati)” と [いう単なる否定が] 述べられているのである<sup>79)</sup>。[第278偈 cd]

この者 [=刹那滅論者] は “存在物が非存在となる (bhāvasyābhavo bhavati)” と [肯定的に] 述べるけれども, それも “存在物が存在しなくなる (bhāvo na bhavati)” ということだけを述べているのである。実に, [何も肯定されなければ,] このようにして, それ [=存在物] は排除されるのである。なぜなら, 否定 [すなわち単なる存在物の排除<sup>80)</sup>] において肯定はありえないからである。

〔また、消滅しつつある存在物にはいかなる肯定的な属性も存在しないのであるから、〕まさにそれゆえに、これ〔＝存在物〕の消滅にはいかなる原因も存在しないのである。すなわち、

もし、〔消滅しつつある存在物に〕何かなされるべきものが存在するのであれば、〔その存在物〕が他〔＝消滅の原因〕を必要とすることもあるであろう。〔しかし、実際にはなされるべきものは何もないのであるから、〕何もなさない実在物〔すなわち消滅の原因〕がどうして何かある〔存在物〕によって必要とされるのか。

〔第279偈〕

実に、“なされるべきもの (kārya)” が存在する場合に、“なすもの (kāraṇa)” が存在するのである。そして、消滅しつつある存在物にはなされるべきものは何も存在しない、ということはすでに述べた。それゆえに、消滅の原因と呼ばれるものは存在物に対して何もなさないのであるから、何もなさない〔消滅の原因〕が〔存在物によって〕必要とされるはずはないのである。

〔問：〕「それでは<sup>80)</sup>、今や、付加的特性が生起しておらず、同じ状態にある存在物が、どうして、“消滅した”と言われるのか。」

〔答：〕〔消滅の原因から、存在物の〕付加的特性が生起する〔と承認した〕としても、それ〔＝存在物〕の〔消滅と呼ばれる〕かの付加的特性のみが生起したのではないか。したがって、どうして、それ〔＝存在物〕が“消滅した”と言われるのか<sup>82)</sup>。それゆえに、同じ状態にあるこれ〔＝存在物〕が“消滅した”と言われるのではない。〔そうではなく、〕自ら存在しなくなるということによって、〔存在物は〕“消滅した”〔と言われる〕のであって、別個の事物の生起にもとづいてではない、ということはすでに述べた。実に、〔消滅と呼ばれる〕付加的特性の生起によって、〔存在物が〕“自ら無くなった”と言われるのではない。なぜなら、非存在は、すべての付加的特性および名称の欠如によって<sup>83)</sup>、存在物のすべての属性を離れることを特質とするからである。そして、存在は、生起と結びつくことを特質とするからである。以上のことから、非存在〔すなわち、存在物の消滅〕に対して、何かある別のものの生起が必要

とされることはないのである。

これによって、[消滅は] 原因をもたない [と認めた] 場合でも、生起せずに、消滅が存在するのであるから、存在性と消滅 [とが共存する] という過誤に陥る [という反論] が否定されたことになる。[第280偈]

また、ある者は“消滅が原因をもたないとしても、これ [=消滅] は生起せずに存在するのであるから、存在性と非恒常性と [が共存するという過誤に陥ること] は排除し難い。生起せずに存在するものが原因をもたないというのも矛盾である<sup>84)</sup>。”と考えているけれども、その者も、まさにこれによって [すなわち、消滅は本性をもたないということを指摘することによって<sup>85)</sup> 論駁されたことになる。なぜなら、[消滅時における] いかなる [属性] の生起も承認していないからである。

#### 1.4. (G.149, 4; M.100, 4; P.328,14)

[反論:] 「妨げが何かある生起するものに対してのみ承認される [のであって、すべてのものに対して承認されるのではない] のと同様に、もし、消滅が生起する存在物 [のみ] の本性であって、[虚空のように] 生起しないものの [本性] でないならば [“存在するものは瞬間的なものである” というのは逸脱している<sup>86)</sup>。] [とと言うならば] [第281偈]

[反論:] また、次のように言うかもしれない。「“これら [存在物] は一瞬間存続するという属性をもつ”というこのことが存在物の本性であるとしよう。しかし、そ [のような本性] は生起するもののみの [本性] であろう。実に、“本性”であるからと言って、すべてがすべてのものの本性であるのではない。たとえば、妨げを本性とすることがそうであるように<sup>87)</sup>。」

[答:] [すべてがすべてのものの本性であるのではないという] それはその通りである。そうであっても、

原因の本性が定まっていることにもとづいて、結果における本性は定まっているのである。[しかし、] 非恒常的なものには本質の相違は存在しない。なぜなら、[非恒常的なものの本性の] 相違をもたらすものが存在しないからである。[第282偈]

実に、妨げであれ、他の本性であれ、原因なくして、[あるものにはあり、あるものにはないというように] それぞれ定まることはない。そうではなく、自己の原因[すなわち、妨げ等の属性を生起させる原因]の能力は[それぞれ]確定しており、それと同様の[すなわち原因の能力に相応した]結果が生起するのである。したがって、原因の本性が定まっていることにもとづいて、結果の本性は定まっているのである。また、それ[＝結果の本性が定まっていること]が原因によらない[という見解]についても、過誤をすでに指摘している。我々は、妨げを本性とすることに対する原因の本性が定まっているのと同様に、[何かある]消滅する[本性のみ]を生起させることに対して本性がそれぞれ定まっている[原因である]存在物を認知することはない。もしそうであれば、[原因が定まっていることによって、]それ[＝消滅する本性を生起させる原因]から生起するものはそのように[消滅し]、他は[消滅し]ないことになるであろうが。なぜなら、あらゆる形態[の原因]から生起するものに消滅が見られるからである。

【反論：】「あらゆる形態[の原因]から生起するものは消滅する、ということを確認することはできないではないか。なぜなら、それら[原因全体]を完全に見ることはないからである。実に、さまざまな能力をもった集合因が見られるのである。そのなかには、不滅な本体をもった[存在物]を生起させるような何かある[集合因]があるかもしれない。」[と言うならば。]

【答：】そうではない。なぜなら、認識されうるものが[瞬間的なものであるということが]問題であるからである。[すなわち、]“ある時ある場所である者によって認識されていたのに、あるもの(X)が認識されなくなるとき、それら(X)の消滅は存在性と結びついている”と我々は言っているのである。[認識されうるものである]まさにそれらつくられたものは非恒常的なもので

あると立証される。実に、知識を生起させる本性をもつそれらが消滅していないのに<sup>88</sup>，[知識を] 生起させないであろう，あるいはまた他 [の補助因] を必要とするであろう，というこのような可能性は存在しないのである。なぜなら，[知識を] 生起させるというその本性はすでに完成しているからである。そして，それらが [補助因を] 必要としないならば，誰にもいかなる時にもいかなる知識も起こらないということはないであろう<sup>89</sup>。また，このようなもの [すなわち認識されえないもの<sup>90</sup>] が何か存在するということはない。なぜなら，すべてものがある者によってある時認識されるからである。また，知識一般に対する有効な働きに対してさえ能力がないとすれば，[そのような能力のない] 実在そのものが存在しないことになる。すなわち，それ [=有効な働きの能力] を特質とするものが実在である，ということは後に述べるであろう。そして，それ [=有効な働きの能力をもつ実在] は消滅に対して逸脱しないから，それ [=消滅] は存在性と結びついているのである。

## 2. (G.150, 3; M.100,24; P.329,16)

まさにこのゆえに，これら [=語] の [対象との] 関係の恒常性も否定されるべきである。[第283偈 ab]

まさにこのゆえに，[すなわち，] 先述のように消滅は実在のみに随順する [という理由] で，語 [の恒常性が否定された] と同様に，[語と対象の] 関係の恒常性も否定されるべきである。

また，ジャイミニの学徒たち [=ミーマーンサー学派の者たち] は，“適合性 (yogyatā) と呼ばれる語の能力 (śabdaśakti) が対象認識の拠り所である”と述べているが<sup>91</sup>，それ [=語の能力すなわち適合性] は，決して [語と] 別個の事物ではない。すなわち，“適合性”とは，存在物の特殊な本質 (rūpātisaya) に他ならない，ということは前に指摘した<sup>92 93</sup>。

あるいはまた，[適合性が語とは] 別個の事物であるとしよう。そうであっ

ても,

また、先に指摘した通りの、関係 [が実在するという説] に [付随する] 諸々の過誤によって、語の能力も論駁されたことになる。[第283偈 cd]

実に、関係が [語とは] 別個の事物であるという説については、種々の過誤を指摘した<sup>94</sup>。まさにそ [の過誤] によって、[関係とみなされている] かの語の能力が論駁されたことになるから、改めて [ここで過誤を] 述べるということとはしない。

[未完]

## 註

本稿は、

「ダルマキールティの聖典観——『ブラマーナ・ヴァールティカ』第1章および自註の和訳(1)——」(『哲学年報』第47輯, 1988)

「ダルマキールティの聖典観——『ブラマーナ・ヴァールティカ』第1章および自註の和訳(2)——」(『西日本宗教学雑誌』第10号, 1988)

「ダルマキールティの聖典観——『ブラマーナ・ヴァールティカ』第1章および自註の和訳(3)——」(『哲学年報』第48輯, 1989)

「ダルマキールティの聖典観——『ブラマーナ・ヴァールティカ』第1章および自註の和訳(4)——」(『哲学年報』第49輯, 1990)

「ダルマキールティの聖典観——『ブラマーナ・ヴァールティカ』第1章および自註の和訳(5)——」(『西日本宗教学雑誌』第12号, 1990)

「ダルマキールティの聖典観——『ブラマーナ・ヴァールティカ』第1章および自註の和訳(6)——」(『伊原博士古稀記念論文集』, 掲載予定)

に続くものであり、略号等はこれらに従う。

なお、ダルマキールティの聖典観に関して、前稿以後、以下の論文が発表されている。

木村俊彦「ダルマキールティの言語哲学的聖典論」(『宗教研究』第285号, 1990, pp. 27-43)

木村俊彦「ダルマキールティのマントラ論」(『印度学仏教学研究』第39巻第1号, 1990, pp. 415-411)

(1) K. 510, 17 : puruṣavyatirekeṇānyo hetur asyety anyahetuko vā.

(2) K. 510, 17-18 : tatrāhetukatve nityaṃ bhavet. anyānapekṣaṇāt.

- (3) K. 510, 18-19 : anyahetukatve tu na ca puruṣavyāpārād bhavet. bhavati ca puruṣavy-  
āpārāt.
- (4) K. 510, 20 : anyo vā prthivyādiko bhāvaḥ\* (\*テキストは, prthivyādikābhāvaḥ。)
- (5) K. 510, 23-24 : 「“存在する”というだけで, 消滅は起こるのであり, 他の原因を  
必要とすることはない。そして, 語は存在するものである。それゆえに, [語は] 恒  
常的なものではない。というのが全体の意味である。」 (sann ity eva kṛtvā nāśo bha-  
vati na kāraṇāntaram apekṣate. saṃś ca śabdaḥ. tasmān na nitya iti samudāyārthaḥ.)
- (6) K. 510, 26 : nāśo nāma dharmāntaram.
- (7) K. 510, 28-29 : 「消滅とは, 一瞬間存続するという属性をもつことに他ならない。  
そして, そのこと [=一瞬間存続するという属性をもつこと] は, 他ならぬ [自己の]  
原因から生起するのである。という意味である。」 (ekakṣaṇasthitidharmakatvam eva  
vināśaḥ. tac ca hetubhya evotpadyata iti yāvat.)
- (8) K. 511, 11-12 : bhāvamātrāsvabhāvaḥ syād vināśaḥ, sattāmātrāsvabhāvaḥ syāt.
- (9) K. 511, 15-16 : 「消滅は原因をもたないということが成立しないからである, とい  
う意味である。」 (vināśasyāhetukatvāsiddher iti yāvat.)
- (10) K. 511, 17 : agninā kṣāṭhaṃ dagdham.
- (11) K. 511, 17 : daṇḍena ghaṭo bhagnaḥ.
- (12) K. 511, 24 : pūrvapūrvasya kṣāṭhādikaṣṇasya.
- (13) K. 511, 25 : anyasyottarasya kṣṇasya vikṛtasya bhasmādirūpasya.
- (14) Cf. K. 511, 25-26.
- (15) K. 512, 17-19 : 「しかし, もし, ある事物が生起することによって, 別個の事物が  
消滅する, あるいは見られなくなるのであれば, そのときには, このようにして過大  
に適用されることになるであろう。[すなわち,] 何であれ異なる事物が生起すること  
によって, すべてのものが無くなってしまおうであろう, あるいはまた見られなくなる  
であろう。」 (yadi tv arthāntarotpattyarthāntaram vināṣṭaṃ na dr̥śyate vā, tadātipra-  
saṅgo hy evaṃ syāt. arthāntarasya yasya kasyacid utpattyā sarvam abhūtaṃ syāt, na  
vā dr̥śyeta.)
- (16) K. 512, 19-20 : 「火から生起するその事物のみが, これすなわち薪の消滅なのであ  
って, すべてが [薪の消滅な] ではない。」 (sa eva padārtho 'gnijānmā, na sarvaḥ,  
asya kṣāṭhasya vināśaḥ.)
- (17) K. 512, 21-22 : kṣāṭhasyābhavo vināśaḥ.
- (18) K. 512, 29-30 : 「すべての事物が薪の消滅となるであろう。」 (sarve padārthāḥ  
kṣāṭhasya vināśaḥ syāt.) また, 註19参照。
- (19) G. 142, 18 : kṣāṭha iti を M. 95, 20; P. 320, 18に従って, kṣāṭha iti に訂正。
- (20) K. 513, 16-17 : 「[薪と消滅とは] 互いに補助するものでも補助されるものでもない  
から, [両者の間に] 関係は決して存在しない。」 (parasparam anupakāryopakāratvāt,  
naiva sambandho 'sti.)

- (21) 薪が依拠されるもの (āśraya) であり、消滅が依拠するもの (āśrayin) である。  
Cf. K. 513, 18.
- (22) 消滅が生起するものであり、薪がそれを生起させるものである。Cf. K. 513, 21.
- (23) K. 513, 25-26 : agnikṛto nāṣo na syād iti yo doṣa uktaḥ, sa nāsti.
- (24) K. 513, 28-29 : aparasya dvitīyasya kṣāṭhasyātiśayasamjñakasya janma syāt.
- (25) K. 514, 16-18 : 「[非存在を] 肯定的に結果であると認めるならば、それ [=非存在] は存在となってしまうからである。それゆえに、“非存在をもたらず”，[すなわち] “存在をもたささい” というのは行為の否定にすぎない。」 (vidhinā kāryatvopagame tasya bhāvatvaprasaṅgāt. tasmād abhāvaṃ karoti bhāvaṃ na karotīti kriyāpratiśedhamātram.)
- (26) K. 514, 18-19 : 「[非存在をもたらずとは] 行為の否定にすぎないから。」 (kriyāpratiśedhamātratvāt.)
- (27) K. 514, 22-23 : tato 'rthāntarād abhāvāt kṣāṭhādir bhāvo nivartate.
- (28) K. 514, 24 : 「非存在が欠如するものには、存在性のみが確立されることになる。」 (asato nivartamānasya sattvam eva samarthitaṃ syāt.)
- (29) K. 516, 10-11 : 「自己の場所における他のものの生起を妨げることが阻害である。」 (svadeśe parasyotpattivibandho 'bhigātaḥ.)
- (30) 「等」という語には、香 (gandha) ・味 (rasa) 等が含まれる。Cf. K. 516, 11.
- (31) K. 515, 31-516, 10 : 「暗闇に覆われている瓶等に阻害等が見られるからである。」 (andhakārāvṛttānāṃ ghaṭādināṃ abhigātādidarśanāt.)
- (32) K. 516, 12 : anenaivāvaraṇena; Ś. 390b<sup>1</sup>; 320a<sup>1</sup> : hṛj pa shes bya ba ḥdi nīd kyis.
- (33) K. 516, 15-16 : 「薪の消滅に対する [原因としての] 火について過誤が詳細に述べられたが、そ [の同じ過誤] が、火によってもたらされる異なる事物によって消滅がもたらされる場合にもあるであろう。」 (kṣāṭhavināśaṃ prati yo 'gnau doṣo vis-tareṇoktaḥ so 'rthāntareṇāpy agnikṛtena kṣāṭhanāśe kriyamāṇe syāt.)
- (34) K. 516, 16-17 : 「火によってもたらされる異なる事物であるその消滅によっても、さらに別の消滅と呼ばれる異なる事物がもたらされるべきである。そ [の消滅] によってもさらに別の [消滅] が [もたらされるべきである]。というように無限後退となるであろう。」 (tenāpy arthāntareṇāgnikṛtena nāśenāparam arthāntaraṃ nāśakhyam kartavyaṃ tenāpy aparaṃ ity anavasthā syāt.)
- (35) G. 143, 13 : °abhighaṭa° を °abhighāta° に訂正。
- (36) K. 516, 23 : 「生起するのであるから、薪がそうであるように、消滅も消滅することになるであろう、という意味である。」 (utpattimattvād vināśo 'pi kṣāṭhāvad vināśi syād iti yāvat.)
- (37) K. 518, 18 : 「そうでなければ、[すなわち、] 補助なくして関係が想定されるならば、過大に適用されることになるからである。[すなわち、] あらゆるものがあらゆるものの関係項となるであろう。」 (anyathopakāram antareṇa sambandhakalpanāyām atipra-

samgāt, sarvaḥ sarvasya sambandhī syāt.)

- (38) これは、火等は薪等を直接的に補助するのではなく、薪の關係項である消滅の原因に対して補助をなすから、火等は薪等を間接的に補助するのであるという反論に対する答である。Cf. K. 518, 19-22.
- (39) 「等」という語には、さらに別の補助が想定されることによって無限後退に陥ること等が含まれる。Cf. K. 518, 26-27.
- (40) K. 520, 20 : na hi yo yena svabhāvenātvān asambandhavān.
- (41) Cf. K. 520, 28-29 : sadṛśāparotpattivipralambhād upalakṣitam. uttarakālām santāno-chchittāv anupalambhenāsthitipratipattyā vibhāvayanto niścinvantaḥ.
- (42) G. 145, 7 : yathapratīti yathāpratīti に訂正。
- (43) K. 521, 18 : cetasā vikalpabuddhya.
- (44) K. 521, 20-21 : 「“存在物の消滅の原因をもたない”とは、“これ [=存在物] の消滅は原因をもつものではない”という意味である。」(ahetuko bhāvasya vināśo bhavatīti sahetuko 'sya vināśo na bhavaty arthaḥ.)
- (45) K. 521, 26 : 「原因をもつ消滅を否定するためにという意味である。」(sahetukavināśapratīṣedhārtham iti yāvat.)
- (46) K. 521, 28-29 : bhāvasyānyasmāt kiṃ vināśo bhavati na cety etāvanmātrajijñāsāyām.
- (47) K. 521, 30-31 : 「“<存在物>の<消滅>”というように区別して」(bhāvasya vināśa iti vibhāgam kṛtvā.)
- (48) Cf. K. 522, 12-13.
- (49) K. 523, 11 : 「存在物の消失は述べられていない、という意味である。」(bhāvanivṛttir na kathiteti yāvat.)
- (50) K. 524, 22 : 「そして、もし単純否定にも肯定があるなら、その時には否定そのものが存在しなくなる。」(yadi ca prasajyapratīṣedhe 'pi vidhis tadā pratīṣedha eva nāsti.)
- (51) K. 524, 25-26 : 「たとえば、“非バラモンを連れて来い”と[いう場合に]、バラモンの<除外>によって、クシャトリヤ等が関わってくるからである。」(yathābrāhmaṇam ānayeti brāhmaṇaparyudāsena kṣatriyādeḥ saṃsparśāt.)
- (52) K. 524, 29-30 : tathā ca yasya paryudāsena yad viviktaṃ ucyate na tayoḥ paraspara-avivekaḥ siddhaḥ.
- (53) K. 524, 31 : 「<除外>は、それ(X)以外のもの(Y)との区別によって他方(Y)を表示するということを経質とするからである。」(tadanyavivekenānyopādānalakṣaṇatvāt paryudāsasya.)
- (54) 第276偈。本訳稿99頁参照。
- (55) K. 526, 15 : bhāvo bhavanam utpāda iti yāvat.
- (56) K. 526, 15-16 : bhavantam apekṣate, bhavitāram apekṣate.
- (57) K. 526, 16 : 「生起しようとしているものなくして生起はないからである。」(bhavitāram antareṇa bhavanasyābhāvāt.)

- (58) K. 526, 17 : svabhāva eva vastv eva.
- (59) K. 526, 21 : 「もし、本性をもたないものが作用に関与することがないならば。」(yadi niḥsvabhāvasya nāsti vyāpārasamāveśaḥ.)
- (60) 「等」という語には、「石女の子は非存在である」という表現が含まれる。Cf. K. 526, 23.
- (61) K. 526, 22-23 : 「[どうして]“兎の角は非存在である”と生起を特質とする作用によって言い表されるのか、という意味である。」(śaśaviṣaṇam abhāvo bhavatīti bhavana-lakṣaṇena vyāpāreṇa vyavahāra ity arthaḥ.)
- (62) K. 526, 25-26 : asyeti śaśaviṣaṇasyābhāvo bhavati, bhāvo na bhavati.
- (63) K. 526, 28-29 : 「兎の角等は、非存在であるのか、存在しないのか、という話題に関連して」(kiṃ śaśaviṣaṇādikam abhāvo bhavati, na bhavatīti prastāvasamāśrayeṇa.)
- (64) K. 527, 10-11 : vastuni tasya vināśasya bhāvād utpatteḥ. yaś ca bhavati sa katham abhāvo virodhat. Ś. 399a<sup>1-2</sup>; 326a<sup>1</sup> : dños po ni ḥjig pa deḥi ño bo yin paḥi phir te, rgyu las dños po ḥjig par ḥgyur ro. ここでは、Karnakagominの解釈に従って訳した。
- (65) K. 527, 12 : asāv api vināśaḥ. Ś. 399a<sup>2</sup>; 326a<sup>1</sup> : med pa de yañ.
- (66) K. 527, 13 : bhavanadharmā. Ś. 399a<sup>3</sup>; 326a<sup>2</sup> : bya ba dañ ldan pa.
- (67) K. 527, 18-19 によれば、以下の議論は、それであるか他であるかという選択肢を逸脱するものとしてブドガラを例にとる反論者との対論である。
- (68) たとえば、ブドガラは五蘊を本性とするものではないけれども、五蘊と関係があるから、五蘊と別個なのでもない。Cf. K. 527, 24-26.
- (69) 五蘊から生起するブドガラは、五蘊の結果なのであるから、それであるとも他であるとも言い表されない。Cf. K. 528, 10.
- (70) G. 147, 5; K. 528, 11 : sarvakāraṇānām. T. 510a<sup>1</sup>; 346b<sup>6</sup>; S. 399b<sup>5</sup>; 326b<sup>2</sup> : rgyu dañ ḥbras bus thams cad. Cf. G. Additional Notes (p. 185).
- (71) K. 528, 15-16 : svabhāvayoḥ parasparam ananugamanam amiśribhavanam anyattvam.
- (72) 関係がないことにもとづいて、また、ブドガラは表現されえず (avācya), 五蘊は表現されうる (vācya), という属性の相違にもとづいて、ブドガラは五蘊とは別個のものである。Cf. K. 528, 20-21.
- (73) K. 529, 11 : 「しかし、[実際には] 顕現しないのである。それゆえに、ブドガラは決して存在しない。」(na ca pratibhāsate, tato nāsty eva pudgalaḥ.)
- (74) K. 529, 14-15 : 「ブドガラの知識が色の知識なくしてないということはない、という意味である。そして、このようにして、知識によってもたらされる関係はない、という意味である。」(na rūpādijñānanāntariyakam pudgalajñānam ity arthaḥ. tathā ca na jñānakṛtaḥ pratibandha iti bhāvaḥ.)
- (75) K. 529, 21 : pratyāsattiḥ sambandhaḥ.
- (76) K. 529, 22-23 : svayaṃ pratyupatiṣṭhate, ātmānaṃ grāhayatīti yāvat.
- (77) K. 529, 24-26 : 「関係のないものが顕現する場合に、必ずブドガラが顕現するので

あれば、そのときには、何であれあるものが顕現する場合に、完全に関係のない他のものも認識されることになる、という意味である。」(apratibaddhe pratibhāsamāne, yadi niyamenā pudgalāḥ pratibhāsatē, tadā yasya kasyacit pratibhāsanē 'nyo 'py atyan-tāsaṃbandhāḥ pratiyata iti arthaḥ.)

- (78) K. 529, 30-530, 10 : 「結果にもとづいて原因が認識されるようには、原因にもとづいて結果が認識されることはない、という意味である。」(yathā kāryāt kāraṇapratititā tathā na kāraṇāt kāryapratitir bhavatīty arthaḥ.)
- (79) K. 530, 24-25 : 「何も肯定されていないのである。それゆえに、刹那滅論者には、非存在についてそれであるか他であるかという選択肢が起こることはない、と考えられる。」(na kasyacid vidhānam. tato nābhāvaṃ prati kṣaṇikavādināḥ tattvānyattvavikalpasyāvatāro 'stīti manyate.)
- (80) K. 530, 28-29 : pratiṣedhe bhāvamātravyavacchede.
- (81) K. 531, 17 : 「消滅しつつあるものにいかなる付加的特性も生起しないのであれば。」(yadi vināśyato nātiśayaḥ kaścīd utpadyate.)
- (82) K. 531, 22 : 「あるものが生起する場合に、他のものが消滅することはない。」(na hy anyabhāve 'nyasya nāśaḥ.)
- (83) K. 531, 25-27 : sarve ye 'tiśayaḥ sāmānyalakṣaṇāḥ, yāś copākhyāḥ vyapadeśāś teṣāṃ nivṛtṭyā. sarvasāmānyavyapadeśanivṛtṭyety arthaḥ. Ś. Ē3a<sup>3-4</sup>; Ē2b<sup>4</sup> : nus paḥi tha sñad thams cad ldog pa shes bya baḥi don to.
- (84) K. 532, 15-16 : 「ある時に [のみ] 生起するものが原因をもたないというのは矛盾であるからである。」(kādācitkasyāhetutvavirodhāt.)
- (85) K. 532, 16 : anenaiva vināśasya nīrūpatvapratipādanena.
- (86) K. 532, 20-21 : tathā ca yat sat tat kṣaṇikam ity etad vyabhicāri.
- (87) K. 532, 27 : 「実在の本性であっても、すべてのものが妨げを本性とするのではないのと同様に、という意味である。」(yathā pratighātmatā vastusvabhāvatve 'pi na sarvasya bhavati tadvad ity arthaḥ.)
- (88) K. 534, 19-20 : 「消滅していない、すなわちその同じ本性に立脚している。」(anaṣṭas tasminn eva svabhāve sthitāḥ.)
- (89) K. 534, 26-28 : 「すべての者にすべての時に自己を対象とする知識を生起させるであらう。しかし、[実際は] そうではない。なぜなら、時には知識が見られないことがあるからである。そして、それゆえに、知識を生起させないものは [知識を] 生起させる本性を失っているのである。」(sarvasya sarvadā svaviśayāṇi jñānāni janayeyuḥ. na caivam. kādācit jñānadarśanāt \*. tataś ca jñānam ajanayanto janaka-svabhāvat pracyutā iti gamyate. \*テキスト jñānadarśanāt を, Ś. 5b<sup>7</sup>; 5a<sup>5</sup> : ḥgaḥ shig gi tshe śes pa med paḥi phyir ro によって訂正。)
- (90) K. 534, 30 : evaṃbhūtam ajñeyam.
- (91) ミーマーンサー学派によれば、語と対象の関係とは語の対象表示能力に他ならない。

- (92) Cf. G. 113, 19. 拙稿「ダルマキールティの聖典観(1)」20頁参照。
- (93) K. 535, 28: 「それゆえに、語が非恒常的なものである場合には、[語と]」別個の事物ではないのであるから、適合性 [すなわち関係] も恒常的なものではない、という意味である。(tena śabdasyānityatve योग्यताया अप्यनित्यत्वमव्यतिरेकादिति  
bhāvah.)
- (94) ダルマキールティによる関係批判については、拙稿「ダルマキールティの聖典観」(1)および(2)参照。

(本稿は文部省の平成二年度科学研究費補助金(奨励研究(A))による研究成果の一部である。)